

歴代誌第一 12 章 38 節 「一途な心」

1 A 二心の問題

1 B 調子を合わせる問題

2 B 感情の問題

2 A 一途な心

1 B 忠誠心

2 B 時を知る

本文

歴代誌第一 12 章 38 節を開いてください。午後礼拝では、歴代誌第一 10 章から 13 章までを学びたいと思っておりますが、今朝は 12 章 38 節に注目してみたいと思います。

誠実な心で、並び集まったこれらの戦士たちは、ヘブロンに来て、ダビデを全イスラエルの王にした。イスラエルの残りの者たちもまた、心を一つにしてダビデを王にした。

歴代誌第一は、10 章からダビデの国が確立する話が始まります。サウルがペリシテ人によって殺されますが、ダビデはサウルが活着している間、逃亡生活を送っていました。その中で、少人数ではあるけれども、ダビデのところにやってきて、彼に忠誠を誓う兵士たちが起こされていきました。その勇士たちの話が 11 章と 12 章にあります。サウルの部族ベニヤミン族からも、ガド族からも、ユダ族、そしてマナセ族から、そしてゼブルン族から、イスラエル全部族にくまなく、サウルが支配している中でダビデに忠誠を誓った者たちが出てきました。これらの人々が心を一つにしていたので、ダビデが全イスラエルの王となることができました、とあります。

1 A 二心の問題

私たちは先週、一人の姉妹に水のバプテスマを授ける恵みにあずかりました。バプテスマ式に姉妹にお見せした御言葉がローマ 6 章 3-4 節でした。「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。」イエス・キリストにつくバプテスマです。イエス・キリストに傾注する、キリストに忠誠を誓うバプテスマと言ってもよいでしょう。他の事柄にも自分自身の心が引き寄せられてしまうのですが、「しかしそれでも、私は自分自身をキリストに捧げる」という決意をされました。この決意が、ここにある「心を一つにする」ということです。自分には肉の弱さがあつても、そ

れでもただキリストのみに頼っていく道を選び取りたいという意思表示です。このような心には、神はキリストの恵みを注いでくださいます。キリストの御霊が必ず、その弱さに働いてくださり、助けてくださいます。

1 B 調子を合わせる問題

ところで私たちの心は、一つにせず、二つに分けることがあります。二つに分ける問題は、自分の心がキリストに向いていない、ということではありません。自分の心と思いを、キリストに寄せてはいるのです。けれども、同時に世に関わることに自分を傾倒させています。イエス様は、「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。（黙示 3:15-16）」と言われましたが、生ぬるくなっています。信仰の熱心さは、ほどほどに、いわば「低燃費で走行しましょう」という態度です。ある方が、このような人を、「『救い』『天国行きの切符』の予約席を失わない限りにおいて、極力燃費をおさえる、エコな信仰生活スタイル」と表現していました。

このことについて、この前のマラナサ・バイブル・キャンプで、ある兄弟と話している間に、私はある人物のことを思い出しました。何をもちて主は私たちを喜んでくださっているのか？ということですが、主に召されている、主に愛されている人というのは、「情熱」を持っているということです。どんなことがあっても、神からの祝福を強く願っていて、どんなに自分が叩かれても、砕かれても、「主を、私を祝福してくださらないかぎり、あなたを決して話しません。」という情熱を持っています。その例として神に愛されたヤコブがいます。彼の人の柄そして人生は、その名前の通りめっちゃくちゃでした。しかし、どこにも彼が主によって嫌われていることが書かれていません。むしろ、主は彼を愛し、彼を祝福し、イスラエルという新しい名を与えられました。その理由が、彼の神に対する情熱でした。神の御使いと格闘して、太ももの関節を外されながらも、「あなたが祝福していたださらないかぎり、私はあなたを離しません。」と泣きながら願ったのです。

その反対がエサウでした。彼は長子の権利を、豆スープと引き換えに売り払ってしまいました。彼は、人間的にはスポーツマンで、野性的で、男らしさがあつた人間でしょう。けれども、神に対する情熱がなかったのです。いわゆる人間的に出来ているかどうか、が霊的には優れている特徴ではありません。主への情熱、主に心を一つにしていることが、真の霊的品格であります。

新約聖書で、ヤコブ書にこうあります。「二心の人たち。心を清くしなさい。（4:8）」そして私たちが交読文で読んだ詩篇で、ダビデがこう祈っています。「私の心を一つにしてください。御名を恐れるために。（詩篇 86:11）」

二心になる原因として、世の流れに自分を合わせるという問題があります。ローマ 12 章 2 節に、「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」とあります。この世と調子

を合わせる、というのは、「この世という型に自分をはめる」という意味合いがあります。この世が提供しているものに自分を合わせていく、調子を合わせていく、ということです。この世にあるものへの気遣いがあります。それらをすべてに自分を合わせて行っていこうとします。ですから、いろいろなことに自分は関わっているのですが、そのすべてにおいて全うすることはなくなります。

ヤコブの息子十二人で、初めに生まれた息子はルベンでした。ルベンは長男なのに、長子の権利を受け取ることはできませんでした。なぜか？ヤコブが預言をして、こう言いました。「ルベンよ。あなたはわが長子。わが力、わが力の初めの実。すぐれた威厳とすぐれた力のある者。だが、水のように奔放なので、もはや、あなたは他をしのごことはない。あなたは父の床に上り、そのとき、あなたは汚したのだ。・・彼は私の寝床に上った。・・（創世 49:3-4）」水のように奔放である、と父ヤコブは言いました。自分の周りがある状況に対して、そのまま水のように流れて行ってしまいます。その対照的な人物が、ユダです。ユダは、ベニヤミンをエジプトに送ることをかたくなに拒む父に対して、「ベニヤミンにもしものことがあったら、私が保証人となります。」と言って父を説得しました。そして事実、ベニヤミンが窃盗の疑いで投獄されそうになった時に、ユダが進み出て、自分が代わりに牢に入らせてほしいと執り成しました。ルベンは、目の前にあるものに流されていったのに対して、ユダは心に定めて、その定めたことに基づいて行動しました。

2 B 感情の問題

私たちには感情の問題があります。感情は喜怒哀楽と呼ばれるように、それには起伏があって当たり前のものです。私たちの感覚にもっとも身近な存在であり、24 時間、それと付き合っています。そして、今、私たちの時代は感情を最も大切にしようとする流れがあります。そこで、何が感じているのかをもっとも大切にする傾向があります。それで、感じたことにしたがって動いてしまうので、心が定まらず水の流れのように動いてしまうのです。しかし、愛、喜び、平安などは、単なる私たちの感情を超えた、はるかに高い次元のところに存在します。

愛というのは感じていることではなく、神の命令に従順になることです。「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。（ヨハネ 15:10）」そして、一般的に言われる喜びは、実は「幸せ」と言い換えるべきものです。状況や環境に左右されるものだからです。真の喜びは状況に左右されず、主ご自身に留まることによって得られるものです。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。（1ペテロ 1:8）」言葉に言い尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びです。主との真実な関係の中から湧き上がってくるものであります。そして平安は、感情が大きく揺れ動いてもなおのこと心に存在している安定した思いであります。「そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。（ピリピ 4:7）」人のすべての考え、理解を超えた神の平安です。

ですから、クリスチャンは矛盾した発言をすることができます。「悲しいのに、喜んでいる。」「憎たらしいはずだ

ったのに、愛している。」「今の状況がさっぱり分からず混乱しているのに、なぜか心が平安だ。」ということが起こるのです。これは、主に心をすべてゆだねている時に、感情に関わらず主の命じられていることに意志を委ねている時に与えられる特権です。

2 A 一途な心

では、ダビデのところに集まってきた勇士たちが、どのようにして心を一つにしていったのかを見ていきましょう。彼らは基本的に、「世の流れに逆らった」者たちでした。時はサウルが政権を握っているイスラエルです。大多数がその王権の下に留まり、ダビデの居場所を通報することをイスラエル人の一般民に対する義務としていました。そして軍は、ダビデを見つけ次第殺すことを命じられていました。その中で、続々とダビデのところに彼らは来ていたのです。彼らがなぜそのような行動に出たのでしょうか？彼らは権威に従えない単なる反逆児だったのでしょうか？いいえ、主のことばがあったからです。「しかもあなたの神、主は、あなたに言われました。『あなたがわたしの民イスラエルを牧し、あなたがわたしの民イスラエルの君主となる。』」（1歴代誌 11:2）」ダビデが王となることは、主がはっきりと語られた御心であったからです。

1 B 忠誠心

けれども多くの者は、サウルを恐れて、主の言葉があることは分かっているにもかかわらずそれに従うことはありませんでした。世に調子を合わせているほうが楽なのです。しかし、その流れに逆らっても主が語られたことを行なっていくことには、勇気と主の御心に対する一途さが必要になります。

逃がっているダビデのところにやってきた者たちに対して、ダビデは警戒していました。「あなたがたは味方なのか、それとも私を敵に引き渡すためにやってきたのか。」と尋ねました。すると、アマサイという男を神の御霊が捕えられました。「ダビデよ。私たちはあなたの味方。エッサイの子よ。私たちはあなたとともにいる。平安があるように。あなたに平安があるように。あなたを助ける者に平安があるように。まことにあなたの神はあなたを助ける。（1歴代誌 12:18）」新改訳では、「私たちはあなたの味方」となっていますが、新共同訳はこう訳しています。「ダビデよ、わたしたちはあなたのもの。エッサイの子よ、あなたの味方です。」自分たちはダビデのものである、それによって私たちはあなたの味方である、と言っています。

これを一言でいうと「忠誠心」であります。神がダビデを王としておられる。したがって、ダビデに与えられた権威に服従することが神の御心であると言いました。神から与えられた権威に自分の身を置くこと、これが心を一つにする方法です。

ダビデを王とするように導いたのはこれら勇士たちですが、同じように新約聖書においても、兵士が主に高く評価されています。福音書には、イエスの御言葉にある権威に驚いている群衆の姿を見ますが、逆にイエス様が驚かれた人物が、ローマの百人隊長です。彼は、イエス様に「ただおことばだけをください」と言って、自分の僕の病気をいやしていただけるようお願いしました。「ですから、私のほうから何うことさえ失礼と存じました。ただ、

おことばをいただかせてください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け。』と言えば行きますし、別の者に『来い。』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ。』と言えば、そのとおりにいたします。（ルカ 7:7-8）」軍隊にある指令系統、その命令は、神とその言葉の権威に身を置く私たちの模範になります。

2 B 時を知る

そしてもう一つ、ダビデについてきた勇士たちの特徴として、「時を知る」ことがあります。「イスサカル族から、時を悟り、イスラエルが何をなすべきかを知っている彼らのかしら二百人。彼らの同胞はみな、彼らの命令に従った。（12:32）」この時とは、神がイスラエルにダビデを王として立てる時であります。サウルがペリシテ人との戦いをしている中で、主がサウルをペリシテ人の手に渡す、その御霊の流れを彼らは感じ取っていたのかもしれませんが。その御霊の導きに逆らうことなく、時を悟って、彼らはダビデのところにやってきたのです。

イエス様は、同時のユダヤ人たちに「時代」という言葉を何度も使われました。「悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。しかし、ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられません。（マタイ 16:4）」時代とは、約束のメシヤが到来した時代です。ユダヤ人が待っていたメシヤが来た時の世代であります。一世代を四十年だとすると、主が公生涯を始められたのは紀元三十年頃ですから、紀元七十年、エルサレムの神殿がローマによって破壊されて、彼らに神の怒りが下りました。イエス様が数多くの奇跡と徴によって、ご自分が神から来た方であることを証明したのに、彼らはそれを悟ることはありませんでした。

時をわきまえなければいけないことは、使徒たちの手紙にもあります。つまり、教会の人々、私たちにも語られています。「あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武器を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。（ローマ 13:11-13）」今が、主の来られる前夜である、だから夜の行いではなく、昼間らしい正しい生活をしなさい、ということです。

そして同じように、エペソにある教会にもパウロはこう勧めています。「そういうわけですから、賢くない人のようではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。（エペソ 5:15-16）」今は悪い時代である。神がこの地上に裁きを下す時代が近づいている。だから、機会を十分に生かすような賢い生き方をしているかどうか問われている、主の御心が何であるかをよくわきまえること、ということです。

世の流れがあるのと同じように、神の御霊の流れがあります。時を悟り、その機会を見逃さず、しっかりと生かして用いていくことによって、私たちの心は二つに分かれずに済みます。主が来られるのが近づいているのですか

ら、私たちはこの世に関する事で思い煩ったりするのではなく、主に関する事に自分の身を任せることができるのです。

最後に、ダビデ軍団は最強でした。それは、彼らの人数が多かったからではなく、ダビデにつく人の人数が多かったからではなく、ダビデのつく人々の心が、ダビデを王と定める神の心と一つになっていたからです。一途な心、一つ心こそが、たとえ少人数でも神が働かれる要件となります。「主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心のご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださいませ。（歴代誌第二 16:9）」心が全く一つになっていれば、たった一人でも主はその御力を表してくださいませ。私たちが集中しなければいけないのが、どこにあるかを覚えて祈っていきましょう。